二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

黒薔薇の騎士

聖帝ローザ

小説 筑摩十幸

挿絵 助三郎

序　章　006
第一章　北の聖帝　012
第二章　魔少女侵略　048
第三章　地獄の拷問　069
第四章　魔女裁判　102
第五章　処刑台の女帝　160
第六章　禁断の父娘相姦責め　209

登場人物紹介

Characters

ローザ・フリージンガー

亡き父のあとを継ぎ、シュバルト神聖帝国を治める女皇帝。聖薔薇騎士団を率いて魔族から国民を守る、騎士としての顔も持つ。

アルベルト

ローザの父の双子の兄。神聖教会の最高権威、教皇の位に就く。

メリル

人形リリルを抱いた、孤児院に住むあどけない少女。

ヨハン

神の血をひくといわれる「御子」として、シュバルト神聖帝国で守護され、崇められている少年。

ブリジット・ローゼンバーグ

若くしてランドール領王国の国家元首となった姫。「白百合の剣士」と名乗る仮面の剣士に扮し、ルハサン連邦の支配に抵抗している。

スティア

ランドールの軍事顧問としてブリジットを支える、義手の女剣士。

『第三章　地獄の拷問』より

つまりここは訊問室とは名ばかりの拷問部屋なのだ。神聖な教会の地下にこんなモノがあろうとは、さすがのローザも知らなかった。

その部屋の中央に据えられたX字型の拘束台に立たされ、ローザの身体は両手両脚を開いた磔の状態にされてしまう。

「驚いたかね。魔に対する備えは我々もしているのだよ」

皮肉っぽく嗤う教皇。いやらしく目を細め、聖帝の身体を上から下まで舐めるように見つめる。拘束によって伸びやかなスタイルやスラリとした脚線が強調されている。鎧の上からでも双乳のボリュームや腰回りの肉付きのよさはうかがえて、牡の本能を強烈に刺激してくる。

「フフフ、どんな声を聞かせてくれるかな」

棚にある責め具を物色しながら、鼻髭をヒクヒクさせる。美しく気高い聖女の身体をこれから思うままに蹂躙するのが楽しみでならない様子だ。

「変態のサディストめ。責めたければ好きなだけ責めればいい。私は絶対貴様たちには屈しない！」

キラリと光る紅瞳が憎むべき男を、その魂までを射る。

「勇ましいことだな。お前のその心が折れるところをぜひ見てみたいものだ」

負けずに言い返すと、不躾に伸ばされた手が鎧の胸当て部分を容赦なく外しにかかる。

「触るな！　ぶ、無礼者っ！」

叫んだものの、首も腰も頑丈なベルトで固定されているのでほとんど抵抗できない。あっさりと胸の装甲が引き剥がされ、美麗な乳丘が露わにされた。

「ほうほう、これは見事だ」

雪の結晶を集めて作ったような白く染み一つない乳房。成熟された女体に相応しい柔らかさと豊かさが、男たちの視線を跳ね返すように凛と屹立している。全体の量感に較べると乳輪と乳頭はやや小振りなほうで、完熟一歩手前の初々しさも匂わせていた。

鎧によって搾り出される形になっているため、胸の谷間は深く、溢れんばかりの乳肉が一層強調されているが、それを差し引いても片手に収まりきらない豊乳ではあった。

「み、見るなっ！」

初めて実感する男の舐めるような卑猥な視線。氷壁のように硬い精神を持つ聖帝といえども、羞恥心は抑えきれない。美貌や胸の肌が赤みを差し、ジリジリと火照り始める。

「いい女に育ってくれて、父親代わりの私も嬉しいぞ」

盛んに鼻髭を震わせながら、アルベルトは僧兵から鞭を受け取った。硬い木製の芯を黒革で巻いた乗馬鞭である。小振りな割には強烈な打撃力を持つ拷問具だ。

「ふざけるな！　貴様を父親代わりと思ったことなど一度もないっ！」

「そうかね。私はお前を愛していたぞ。お前が幼い頃からな」

おぞましく歪んだ愛情を告白しつつ、鞭を思いきり振りかぶる。

「私の……神の愛を受け取れ！　ローザ！」

ピシィィィッ！
痛烈な一撃が右の乳房に弾けた。
「うっ！　っっっっうぅうっ！」
真っ赤なミミズ腫れを刻まれた乳肉がブルンブルンと波打つ。その波が治まりきらないうちに
ピシィィィ――――――ッッ！
二撃目が叩き込まれて、乳房がゴム鞠のように跳ね回った。
「う……っっっ！」
灼熱感を伴う激痛が、胸の奥、肋（あばら）を軋ませ心臓にまで食い込んでくる。肺の空気が搾り取られ呼吸もまともにできない。
「どうだ？　ローザ！　フハハハハッ！」
荒々しい本性を剥き出しにして、アルベルトが続けざまに鞭を振り下ろす。
バシッ！　ピシィィッ！　バシィィィンンッ！
双乳に縦横無尽に刻まれていく赤い筋。乳房がもぎ取られてしまいそうな痛みで、目の前に何度も火花が散る。特に敏感な乳首を打たれたときには意識まで吹き飛ばされそうで、痛苦に耐える美貌に滝のような汗が噴き出した。
「ふふぅ……どうだ。鞭の味は？」
息が上がってしまったようで、教皇は一旦鞭打ちを中断させて聖帝の顔を覗き込む。

『第四章　魔女裁判』より

汚辱感に背中の産毛が逆立つ。なんとか吐き出そうとするのだが、出口は男根で完全に塞がれている。

「飲め、飲めよ。吐き出したらタダじゃおかないぞ！」

さらに男は射精を続けながら聖帝の高貴な鼻を摘み、飲精を強要した。

「む、ぐぐ……っ」

急に呼吸を寸断されて混乱し、ローザはたまらず腐臭漂う精液を飲み込んでしまう。

ゴク……ゴキュ……ゴクッ……。

（ああ……汚い精液が……私の中に……入ってくる……）

汚濁の粘液を飲み下すたび、胸奥が燃えるように熱くなる。怒りと悔しさのせいだけではなく、何か得体の知れない情感が聖帝の心の奥底で蠢動し始めていた。

「へへへ、飲んでる。聖帝様が俺の一ヶ月溜めたザーメンを飲んでるぜぇっ！」

淫らな歓声を上げ、若い囚人はようやく男根を引き抜いた。

「ハアハア……ゲホゲホッ……」

そんなものを飲まされてしまった屈辱で胸が張り裂けんばかりだが、同時に下腹の疼きもますます大きくなっていた。淫気が身体の隅々にまで広がっていくのがハッキリ自覚できた。

その影響が最も顕著に表れるのが女体の秘奥で、責め具をくわえ込まされた媚粘膜がジンジンと甘く痺れ始める。

（うう……なんなんだ……この感じは……）
不吉な予感にローザは思わず太腿を摺り合わせた。
「聖帝様……」
「ローザ様が……囚人の精液なんかを……」
神聖不可侵だった聖帝が穢される姿を目の当たりにして、民人の間に落胆とも失望ともつかない、微妙な空気が流れ始める。ローザが魅力的なだけに、酸鼻な拷問からも目を背けることができないのだ。
「次は俺だ」
若い男と入れ替わりに、すぐさま次の男が迫ってきた。さっきの男よりも身体が大きく筋肉質で、勃起もまた雄大なサイズを誇っている。
「ま、まて……うう……んぐぅっ！」
まだ精液の残滓が残る唇に、再び剛棒が突き込まれた。口いっぱいに頬張らされ不浄の匂いも味も一層強く感じさせられる。嘔吐感がこみ上げる一方で、顎を裂き舌を押しのける勃起の逞しさに僅かに気圧されている自分を感じる。
今までどんな強大な敵にも臆することなく立ち向かってきた自分が、不潔な囚人の肉棒の前に怯んでいる……？
（そんな、そんなことは絶対にない！　あるはずがない！　しっかりしろ、ローザ！）
心の中、ローザは自分を叱責した。神聖なる帝国の皇帝が、囚人如きの前に屈服するな

どあってはならないことだ。
しかし現実に女体のあちこちに変化は表れつつあった。精液を飲まされたせいか、身体の芯がアルコールに酔ったように火照っている。呼吸も次第に荒くなり、全身に汗が滲み出していた。ひざまずかされた脚も力が入らず、突き出された腰がクネクネ揺れてしまう。
その変化を悪辣な男たちが見逃すはずがなかった。
「どれ、少しは反応してきたか」
アルベルトの手が伸びて、腰鎧の下、下穿きの底をうかがう。
「うくくっ」
憎い敵の手で女の大切な箇所をまさぐられ、ローザの腰がピクッと震えた。
「ほんのり湿っているようだが、まだハッキリせんな」
いきなり下穿きをつかみ、一気に尻タブまで引き下ろした。
「おおっ」
「なんと」
雪白の尻肉が露わになり、教会内が大きくどよめいた。魔女の裁判では、こういう光景も珍しくはないが、それが聖帝に対しても実行されるとは思っていなかったのだ。
(ああ……見るな！　見ないでくれっ！)
いつも堅牢な鎧で身を固めているだけに、人前で肌を晒すのは肌を灼かれるような恥ずかしさだ。

しかしアルベルトが尻タブを掻き拡げると、さらにもう一段強い驚きの声が上がった。
「お、おい。あれはなんだ⁉」
「薔薇の……花……？」
「でも、どうしてあんなところに？」
周囲のざわめきが大きくなりローザは羞恥と同時に不安に駆られた。確かにお尻には薔薇の痣があるのだが、それにしては周りの反応は妙に生々しい。何かとてもいやらしいモノを見るような目つきなのだ。
（なんなんだ……一体……何が起こっている……？）
彼女が狼狽えていると、一旦唇からペニスが引き抜かれ、代わりに手鏡が差し出された。
「よく見てみろ」
その鏡がお尻を含めた股間を映し出し、ローザはギョッと目を剥いた。
「こ、こんな……⁉」
ムチッと張りつめた二つの透き通るように白い臀丘。その間に深く走る縦溝の底に、可憐な蕾がひっそりと息づいているのだが、驚いたことにその窄まりを中心にして赤い薔薇の痣が花弁を広げているのである。
羞恥に肛門がヒクヒクと震えれば、それにあわせて薔薇の花もヒクヒクと蠢き、見る者になんとも淫らな印象を与えずにはおかない。
「こ、こんな……私の身体に……な、何をしたんだ……っ？」

「何もしておらん。尻穴に花を咲かせるなど、これぞ魔女の証であろう。フハハハッ」
「違う！　デタラメもいい加減に……っくぁぁッ！」
抗議を遮るように張り型が淫振動を子宮に浴びせかけてきた。子宮に直接電流を流されたような衝撃で、背筋が弓なりに反る。女としての急所を徹底的に責め嬲られ、女の反応を引きずり出されてしまう。
「フフフ。尻を見られて感じておるようだな」
卑猥な笑みを浮かべながらさらに下穿きを太腿までズリ下ろす。
「う、うう……や、やめろ……」
多くの国民の前で聖域まで完全に剥き出しにされ、羞恥が燃え上がった。淫らな玩具をくわえたまま裁判に臨んでいることがバレれば、状況は悪化するに決まっている。国民からの信用を失い、ますます魔女の疑いが強まってしまうだろう。
（そ、それだけは……）
少しでも隠したくてお尻を揺すってしまうが、却って男たちの淫情を掻き立てるだけであった。
「やはり濡れておるわい」
淫欲に濡んだ目を針のように細めるアルベルト。幸か不幸か、責め具は完全に埋没しているので見えないが、クレヴァスがドロドロに濡れてしまっているのは一目瞭然だった。
「おお……聖帝様……」

『第四章　処刑台の女帝』より　その１

て、不屈の意志を漲らせている。
裁判で魔女だと断定しながら、いまだに処刑しないのはなぜなのか？
『ローザよ、私の妻になるつもりはないか』
アルベルトに囁かれた言葉が混濁した脳裏に蘇る。アルベルトはおそらく若く美しい女帝の身体を欲しているのだろう。執拗な色責めでローザを堕落させ、セックスのことしか考えられなくしてから、あの封印を解くつもりなのだ。
（だとすれば……）
固執は隙を生む。奴が欲望を剥き出しにしたときこそ、逆転のチャンスだ。それまで堕ちたフリをしてジッと待てばいい。
敵が油断するのが先か、ローザの肉体が限界を迎えるのが先か。かなり危険な賭けだが、この状況では他に選択の余地がない。
「んん？　どうした。大人しくなったな」
アナルを下から突き上げていた囚人が訝しむ。
「あ、ああ……き、き……気持ちが……いい……」
男の疑念を打ち消すように、甘えるような艶声が聖帝の唇から漏れ出る。
「おお、そんなに俺のチンポが気持ちいいか」
「は……い……ああン……チンポ……いい……お尻が……気持ちいい……」
とろけるような声で、男心をくすぐる。一週間の同棲生活の間、ローザが快感を訴える

ことはほとんどなかったので、囚人たちは大喜びだった。
「やっと素直になったじゃねえか」
「へへへ。よしよし、本気で可愛がってやるぜ」
垂直串刺しの律動が激しさを増し、薔薇の花びらの中心をこれでもかと撃ち抜いていく。前門の責め具と共鳴して、肛門を犯されているのに淫らな振動は子宮にまで届く。
唇に侵入した勃起も荒々しい往復運動を繰り返す。食道まで届くディープスロートが脳幹を揺さぶる勢いで、叩き込まれてきた。
「う、うぶぅ……イイ……んくちゅ……じゅぷぅっ！　あ、あ……おくちもおヒりも……あそこも……感じて……あおおぉぉンっ！」
ローザは男たちが喜びそうな卑猥な言葉を紡ぎ続ける。心の中ではこれは演技なのだと唱えながら。
だが言葉というモノの力を、ローザは知らなかった。淫らな台詞を口にするだけで、身体はますます燃え上がり、煮え滾るマグマのような情炎が腹の底からこみ上げてくる。
「あああぁっっ！　むあっ、あああん……気もヒいい……あっ、ぅああ～～～ン！」
（え、演技のハズなのに……私……な……なんて……ふしだらな……声……）
浅ましい牝声が、堰を切ったように後から後から溢れてくる。本当に演技なのか自分でもわからなくなってきた。後ろ手に縛られていなければ耳を塞ぎたい心境だ。
そして声だけでなく、肉体もいよいよ被虐のクライマックスへ突入していく。男の腹の

上で女尻が踊るように跳ね、乳房が千切れそうな勢いで上下に弾む。忌まわしい強姦魔の勃起をくわえた薔薇のアヌスが、何重にも締めつけながら腸液で磨き上げていく。犯されていないクレヴァスからも、白く濁った本気汁がトプトプと溢れ出してきた。ここに監禁されて以来、一番の濡れ方だと言っていいだろう。

「オマ〇コドロドロにしやがって、あの聖帝様と同一人物とは思えねぜ」

「さぼるなよ、こっちもいいんだろ」

情熱的な愛撫で硬度を増した勃起ペニスが、激しく喉奥を突く。

「はあぁン……オチンチン……ちゅぱっ……おいヒい……んふっ」

朱唇が醜い性犯罪者のペニスを愛おしげに吸いしゃぶり、ねっとり舌を絡ませていく。

初めての積極的な奉仕を受けて、男は一気に臨界レベルにまで達してしまう。

「くぅっ……もうがまんできねえっ！」

ドプッ！　ドピュッ！　ドビュルルルルルゥゥゥッッ!!

砲身が激しく脈動し、口腔を汚濁の体液で埋め尽くした。

「うぐっ！　んむむぅぅっ！」

注がれるザーメンをひたすら飲み干していくローザ。堕ちている演技をしているつもりで舌を動かすと、おぞましい牡精がいつもほどの嫌悪感もなく飲み込むことができた。それどころか、熱い塊が胸奥に溜まっていくのが、倒錯した恍惚感をもたらしさえする。そんな感覚を舌に感じていると、本当に自分は奴隷にされてしまったのではないかという気

がしてくる。
（ち、ちがう……これは演技……私は堕ちてなんか……いない）
自分を見失わないように心に唱え続けるが、津波のように押し寄せてくる肛悦が理性を押し流そうとする。
「俺もそろそろいくぜ、変態聖帝様よぉ」
追い打ちをかけるように下の男が猛然と腰を動かし始めた。野太い男根に串刺しにされた双臀全体がぽうっと赤く染まり、薔薇の痣も一層紅く花開いていく。
「あぁぁぁ……ッ！　感じる……アナルが……アナルが……感じるのぉ……ッ！」
ズーンズーンと直腸奥深くに杭打ちされるたび、男根と悪魔像に挟まれた粘膜の薄壁に真っ赤な快美の火花が散った。
渇きと快感を同時に味わわされ、心と身体が引き裂かれる。焦れったさを表すように全身の毛穴から淫ら汗が噴き出して、雪肌が油を塗られたように艶めく。身体中の筋肉が突っ張って、ブーツのつま先が何度も床を引っ掻いた。精を飲み干したばかりの唇には淫蕩な笑みすら浮かんでいる。
その姿は端から見れば堕ちたアナル奴隷の姿そのもので、男たちを悦ばせるには十分すぎる艶技だった。もっとも、演じているのだという意識すら曖昧ではあったが……。
「へへへ、こういうのはどうだ」
さらに太い腕が背後から伸びてきてローザの首を締め上げた。

「あおぉ……う……う……」
気道を塞がれ、顔が見る見る赤紫色に染まる。冗談とは思えない、本気で殺されるのではないかと思うほどの締めつけだ。
「へへへ、俺はこうやって女を何人も殺ってきたんだ。マゾの聖帝様にとっては最高に気持ちいいだろう？　天国までイキそうだろ？」
「く……ぁ……くぅ……ひゅ……っ」
ギリギリと猟奇殺人鬼の腕が喉に食い込んでくる。気管と同時に頸動脈も絞められるため、脳への血流が妨げられ、意識を混濁させた。
（しぬ……しんじゃう……）
眼球が毛細血管が浮いた白目を剥いて裏返り、長い舌がだらりと唇からはみ出す。ザーメンと混ざった唾液がだらだらと垂れ流されて、男の腕を濡らしていく。
そのくせ尻だけは貪欲に動き、男と息をピッタリあわせてリズムを刻んでいる。ミッチリ埋め込まれた逞しさを何度も反芻し、覚えようとしている。死の恐怖とない交ぜになった破滅願望が、マゾの情感を爆発的に昂らせるのだ。
「オ、オオ……オオッッ！　ムァオ……オオオッ！」
肛門括約筋は今や火の輪となり、そこを獰猛な野獣がアクロバティックにくぐり抜けていくたびに、身体中の神経細胞が満場の歓声を上げてしまう。
途中何度も意識が途切れ、そのたびにショボショボとオシッコが漏れ始めたが、それを

『第五章　処刑台の女帝』より　その２

「いや、あれは魔女だ。悪魔の使いだ」
果たして民たちは口々にローザを罵り始めた。ローザの聖帝としての高貴なイメージは完全に崩壊したのだ。
「ウフフ。お姉ちゃんったら、いやらしい。でもまだいかせてあげないもんね」
魔少女はどこまでも残虐だ。絶頂寸前というところで、またしても淫具を引いてしまう。
「ああ……ど、どうしてぇ……」
気が狂いそうな焦燥で、ローザの腰がもどかしげに揺れた。
「もう一つ、戒律違反があるはずだが？」
「え……？」
思考が止まりかけている頭で必死に考える。しかしローザが受けた調教はこれくらいで、他には何も思い当たらない。
「この期に及んでまだシラを切るか！　仕方あるまい、処刑の準備を！」
アルベルトが芝居がかった怒鳴り声を上げると、僧兵がローザの身体を取り押さえ、断頭台のほうに引きずっていく。
（こんな……私は……殺されるのか……）
必死の演技も効果がなかったのか。ローザはギロチンに首と両手を固定されてしまっていた。後は刃に繋がっているロープを切れば、ローザの首は斬り落とされてしまうだろう。

文字通り絶体絶命の状況だ。
「魔女の罪状をすべて言わねば、本心より改悛したと認めるわけにはいかん」
アルベルトが突き出されているお尻を撫で回し、返答を迫る。しかしローザは何を言えばいいのか予想もつかない。
「仕方がないね。私がヒントをあげるよ」
メリルがパチンと指を鳴らすと、人混みを掻き分けるようにして何かが処刑台に近づいてくる。
「な……っ⁉」
ソレを見てローザは目を疑った。連れてこられたのは、なんと巨大な牡豚だったのだ。
「ブギーッ、ブギィィィッ！」と品性の欠片もない鳴き声を繰り返す牡豚は、人間の倍近い体重がありそうな巨体だった。黄ばんだ歯列がのぞく口元からダラダラと涎を垂らし、油膜が張ったような澱んだ瞳をギョロつかせている。浅黒い肌からは濃厚な獣臭が漂い、近づくだけで鼻が曲がりそうだ。そして何よりおぞましいのは股間に突き出したペニスで、太く長い真っ赤な勃起は、血塗られた槍のような威圧感があった。
（まさか……そんな……）
あまりのおぞましさにローザは絶句してしまう。教皇が言うもう一つの背徳とは、おそらくこのケダモノとの交わり――獣姦のことなのだ。
「豚は我々の教義で最も穢れた生き物とされている。ゴミでも腐ったモノでも平気で喰ら

い、年中発情して相手構わず交尾を繰り返す……。魔女には相応しい相手だな」
アルベルトの声が死刑宣告のように場内に響いて、ローザは表情を強張らせた。
淫らな魔女として振る舞ってはきたが、さすがに獣姦までは予想していなかった。必死の決意も揺らいでしまう。
「さあ、どうする。魔女としての罪状をすべて告白するか。それともまだ魔女ではないとでも言うつもりか？」
アルベルトはギロチンのロープにナイフの刃を当てた。
「ああ……」
（ここで死ぬわけには……）
しかしいくらなんでも自分から獣を求めるなどできるわけがない。それをしてしまえば人間ではなくなってしまう気がした。激しい葛藤が胸を灼いた。
「ほら、ローザ様が素直になれるようにお前もお手伝いしなさい」
メリルにポンと背中を叩かれた牡豚が、ハアハアと呼吸を荒げながら近づいてくる。そしてその穢れた鼻先を、聖帝の股間に突っ込んだ。
「ヒィッ！」
突然の襲撃にローザは悲鳴を迸らせる。焦らされて敏感になった粘膜には、それはあまりにも衝撃的だった。
「ビギッ、ブギィィッ！」

けたたましく鼻を鳴らしながら暗紫色の肉舌を蠢かせる。そういう訓練も受けているのだろう、豚の舌先は的確に女の弱点を突いていた。

チュブッ……クチュッ……ブチュッ……ズチュッ……！

「う……あぁぁっ！　そこはラめぇっ！」

熱い舌がクリトリスをべろりと舐め上げたあと、膣孔に潜り込んで牝の果汁を啜り飲む。その間もひしゃげた鼻がアヌスの窄まりをクイクイと突き上げて、聖帝を悩乱させる。

（こ、こんな……穢らわしい豚なんかで……どうしてこんな気持ちに……）

獣の鼻息が吹きかけられるたび、肛虐の残り火が煽られて大きな炎へと育っていく。それは焦らされ続けた子宮をも燃え上がらせ、淫らな欲求を膨れ上がらせた。

「そ、そんなに……ンあぁっ！　奥まで……な、舐めないでぇっ！」

まるで子宮を咀嚼するようにしゃぶりついてくる豚のしつこさに、根負けしたように媚肉が火照り始める。ジンジンと疼く襞の合間から牝蜜が湧き出て豚の唾液と混ざり合う。

「お姉ちゃん、濡れてきたね」

「ンあっ……そ、そんな……あぁぅっ！」

淫靡な水音が処刑場に響き出せば、もう言い訳などできなかった。乳首も痛いほどしこっているし、クリトリスも大きく勃起させられてしまう。腋の下やうなじに粘つく汗が湧き出て、甘酸っぱい牝の芳香を漂わせ始めた。

ベチョ……チュプッ……クチュ……クチュン……。

「はっ、はっ……豚の……舌がぁ……あ、あ……頭が……変になるぅっ」
もともと限界近い焦らし責めを受けていた女体は、相手がケダモノであっても反応せずにはいられない。膣襞がビクビクと痙攣しては、奥深くまで侵入した豚舌を愛おしげに締めつけてしまう。そのたびに子宮の底が焙られたように熱くなり、膣孔から溢れ出した蜜で、太腿までべっとりと濡れていく。
「言うのだ、ローザ。民の前で淫らな本性をさらけ出せ！」
ナイフをロープに僅かに食い込ませながらアルベルトが命じた。
「うう……」
（演技……これはすべて演技なの……）
（生き残るためにも、今は淫らな魔女になりきるしか……）
言い訳が道しるべのように赤く燃える細道へ誘う。その先にあるモノがなんなのか、考える余裕すらすでに失われていた。
「ハアハア……変態皇帝ローザの……オ……オ……オマ〇コに……はあぁぅ……っ」
ついに唇が開かれ、苦しげに声を搾り出すローザ。国民は静まり返り、その声に耳を澄ませている。
「オ、オマ〇コに……豚の……ペ……ペニスを……ああぅっ……い、入れて……入れてください」
「フフフ。では豚と交尾がしたいというのだな」

「ああ……はい……ぶ、豚と……交尾が……したい……です」
言い終わるとローザはガクリと頭を垂れた。あまりの惨めさに自我が崩壊してしまいそうだった。
「そんな……あのローザ様が……ぶ、豚なんかと……」
「信じられない……でも……本当にやる気みたいだぞ」
観衆の間に失望と、怒り、欲情といった複雑な感情が広がっていく。偶像が堕ちるカタルシスは、信望の厚さは別として市民にとっては蜜の味なのである。
「ブブブフ……ッ」
民たちの羨望にも似た視線を浴びながら、牡豚が聖帝の腰にのしかかっていく。
「フハハハ。豚よ、その淫売魔女の願いを叶えてやれ！」
「あ……あぅ……」
その重さに背骨が軋み、いよいよ迫った獣との交尾に、絶望の吐息が漏れた。そのくせ飢えに飢えた媚肉は、早くぶち込んでくれとばかりに濡れそぼり、セックスの準備を整えてしまっている。
「ブフフッ、ブフゥゥッ！」
猛々しく反った逸物の鋭い切っ先が聖帝の秘園に狙いを定める。鎖でぽってり充血した花唇まで開かれているので妨げるモノは何もない。粘液に濡れた真っ赤な肉槍は、ぴったりと膣孔の中心に嵌まり込んだ。

「さぁて、いよいよ汚い豚のオチンチンが聖帝様の高貴なオマ〇コの中に入るよ」
エメラルドの瞳を輝かせてメリルが実況すると、決定的瞬間を見逃すまいと観衆の視線が接合部分に集中する。
「ヒッ……アァッ！」
視姦の熱さでヤケドしそうな粘膜の花弁に、豚ペニスの先端がズブズブと埋まっていく。
「うあぁぁぁぁッ！　入って……くるぅっ！」
ケルドに処女を奪われて以来、二週間ぶりに受け入れる男根の圧倒的な破壊力に、ローザは悶絶させられた。責め具と媚毒に責められ続けたものの、やはり生きた勃起が持つ熱さと硬さ、何よりそこから滲み出す精気は、たとえ相手が獣であっても女肉にとって最高の味わいなのだ。
（あぁッ……私……とうとう……豚なんかに……）
ズブ……ズブ……ズブブブ……ッ。
結合が深まるに連れて凄まじい背徳感が背筋に爪を立ててくるが、同時にそれに勝るとも劣らない快感も膣奥にねじ込まれてくる。背徳と快感が激しくぶつかり合って、脳内で紫色の火花を散らした。
「うっとりした顔して。そんなに豚のオチンチンが気持ちいいの？」
グリグリッと粘膜がこじ開けられ、異形のペニスが聖帝の膣内に完全に姿を没した。鋭い切っ先がズンと子宮口に食い込む。

『第六章　禁断の父娘相姦責め』より

外観である。
一方でお尻の辺りはたっぷりの量感を主張し、スカートの裾からのぞく太腿もムチムチした大人の色気を漂わせる。美貌も大人びた雰囲気であるため、全体で見ると衣装は微妙にアンバランスを生み出していた。双乳に至ってはドレスの胸元を大きく突き上げ、今にもはち切れそうである。
しかしそれが却って普段とはまったく違う魅力を引き出しているのも確かで、少女趣味のない男でも、その容姿に奇妙なエロチシズムを感じずにはいられないだろう。
そしてこの衣装にも思い当たるモノがあった。サイズこそ違うが、十二歳の頃、叔父であるアルベルトから贈られた服にそっくりなのだ。当時から鎧や軽装服を着ることが多かったローザは、なんとなく恥ずかしくて一度しか袖を通したことがなかった。そのとき自分を見つめる叔父の目に不穏なモノを感じたのだったが、その予感がこういう形で的中することになろうとは。
そしてもう一つ思い当たることがあった。これはあの不吉な夢に出てきた衣装とよく似ている気がする。つまりこれから自分はアルベルトに……。
「服は気に入ってくれたかな？　ローザ」
部屋に入ってきたアルベルトだが、いつもの法衣ではない。何のつもりなのか、ローザの父が生前身につけていた衣装を着ている。
「お前の身柄は教会が預かることになった。これから私が直々にお前に再教育を施そう」

尊大な口調と裏腹に、口元はにやけて涎を垂らさんばかり。淫らなことを企てているに違いなかった。

「はい……アルベルト……様」

しかしローザも特に反抗することはなかった。意外なほど従順にベッドの上で正座をし、深々と頭を下げる。

「フフフ」

すっかり大人しくなった聖帝の態度に、教皇は満足げに嗤う。

先の公開処刑でローザの威信は完全に地に落ちていた。今やほとんどの国民はローザを魔女であると思い込んでいることだろう。それに対して教会への支持は爆発的に増加し、皇帝派を圧倒している。神聖帝国の実権はアルベルト一人に掌握されたと言ってもいいだろう。

そのうえローザという絶世の美女を手中に収めたのだ。昂奮しないはずがなかった。

「さあ、まずはしゃぶってもらうぞ」

ベッドに上がり込んで仁王立ち。ローザはその前に膝をついてズボンの前をはだけていく。憎むべき敵であるはずなのに、手指は正確に動いて戸惑いを見せない。

「失礼します……教皇様」

つかみ出したペニスは驚くほどの大きさで、普通の男の倍近い偉容だ。亀頭のカリはキノコの傘のように飛び出し、さらに胴部にはミミズのような血管がのたうっている。毒蛇

のような不気味さだが、それを見つめるローザの表情はどこかうっとりとしていた。
「ン……ンチュ……チュプ……チュパッ……」
長く差し出された舌が、鶏卵ほどもある亀頭の上をチロチロと舞っていく。下から上にくすぐるように舐め上げたかと思えば、鈴口のすぐ上の辺りをツンツンと突っつく。そこから再び根本へ降りて、膨れ上がった毛だらけの陰嚢を精一杯広げた唇でしゃぶり尽くす。
「おお……いいぞ……ローザ」
情熱的な愛撫を受けて教皇は顔をほころばせた。常に自分を馬鹿にしたような態度をとっていた姪娘が己の勃起に奉仕する姿は、歪んだ征服欲を満たしてくれる。どんどん嗜虐のボルテージが上がって、ペニスは一層硬く勃起していく。
「教皇様のオチンチン……ンフッ……とっても大きくて……素敵です……ちゅぷっ」
男心をくすぐる媚声を奏でながら、巨大な肉棒を頬張っていく。口の内側を不気味な傘や太い血管が擦っていくが、それさえも完璧なマゾ調教を施された奴隷には甘美な刺激だ。
ムフンムフンと鼻を鳴らし、食道まで迎え入れるディープスロートで巨根を呑み込んで見せた。その間も片手は陰嚢をマッサージし、もう一方の手は男の腰に回され、尻の辺りを撫で回している。
「よし、おしゃぶりはそれくらいでいいぞ」
娼婦顔負けのテクニックで磨き抜かれ、ペニスは真っ赤に充血している。これ以上されたらそのまま射精してしまいそうだった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ちょっと大人のライトノベル

あとみっく文庫

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE INFORMATION NEWS

最新刊のお知らせ

全国書店で好評発売中

借金お嬢クリス ②

42兆円踏み倒してやりますわ

借金返済のため、お嬢様が工事現場で肉体労働…ストリップまで!?

セレブ界も格差社会だ!!

小説／筑摩十幸　挿絵／了藤誠仁

全国書店で好評発売中

借金お嬢クリス

42兆円を踏んで返してやりますわ

セレブな生活を取り戻すために
魔物にバトルを挑む元・令嬢!

小説／筑摩十幸　挿絵／了藤誠仁

発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!
◎期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!